

## 編集室から

令和二年、新年明けましておめでとうございます。令和となって初めての元旦。善き歳をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、皆様にとってどのうな一年だったでしょうか？年末にご縁あって大嘗祭が執り行われた大嘗宮に行って参りました。



上段写真右側が東日本の神を祭るとされる悠紀殿、左側が西日本の神を祭る主基殿です。屋根を伺うと悠紀殿は女性神、主基殿は男性神の様式で、下段写真のように裏手も、開けた庭（主基殿）と、茂る庭（悠紀殿）になっていました。この宮の位置は、江戸城本丸跡で、時代を越えて受け継がれることを感じました。

私事ですが、昨年に初孫が産まれました。孫は令和、娘は平成、私は昭和と親子三代いずれも異なる年号生まれの家族となります。娘は明治生まれの曾祖母に育てて貰ったためか、考え方に古風なところがあります。明治時代を身近に育ったことは、その時代が歴史上だけのものではなく、なんとなく体感していたかも知れません。核家族が当たり前の世の中ですが、嫁ぎ先の両親・祖母とも同居し、接する姿を見ると、世代を超えて伝わるものがある多世代同居の価値について考えさせられます。（は）



のと  
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち  
03-5537-3078  
17:00～23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27  
プラーザ銀座ビル地下1階  
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2020/01  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2020/01  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

謹賀新年

睦 月



白山比咩神社にて  
by hama

今回は、内臓脂肪で作られる悪玉ホルモンがインスリンとあいまって更なる脂肪増加を招くという話をしました。今回はその補足として、肝臓にまつわる話をもう少し続けます。図をご覧ください。は前回の図を基本的に、少し手を入れてみました。臓器を手書きからイラストに変えたのと、内臓脂肪を加えました。内臓脂肪と皮下脂肪の違いが、判り易くなったかと思えます。ですが本当の目的は、肝臓の重要性を理解していただく事です。前回まで述べてきたように、肝臓は腸から吸収された栄養が直ぐに全て流れ込む臓器です。肝臓の働きが低下すると、食後に余った栄養を一時的に蓄えることができなくなり、全身に過剰な血糖や脂肪が溢れ出してしまいます。

肝臓の機能を低下させる原因として、かつてはB型やC型のウイルス性肝炎が重要でした。しかし医学の進歩によってウイルス性肝炎の脅威は著しく低下し、変わって主役に躍り出たのが脂肪肝です。そして脂肪肝の形成に貢献しているのが、腸から吸収される栄養分と内臓脂肪です。

まず、腸から吸収される栄養分の解説です。アルコールと脂肪酸は、説明するまでもないと思います。注意していただきたいのは、果糖です。果糖については、その八割で触れました。もう二年半も前の事なので、簡単におさらいします。果糖は炭素原子四個と酸素原子一個の五個で環状の五員環を作るのですが、環状構造が不安定なため容易に直鎖状になります。直鎖になった果糖は、グリケーションといって他の物質にベタベタ付着する性質を持っています。砂糖水を混ぜながら火にかけて、カラメルが出来る反応です。そんな危険な分子ですから、肝臓は果糖が流れ込むと最優先で処理して脂肪酸に作り変えます。

## 濱の起業塾 『起業塾九着想』

社会事業の経営に関する書物を読んでいると、それは利益の追求を第一に求められる純粋民間企業の経営よりも難しいとされている。社会に貢献するという大儀が優先されるからで、事業体を維持する経営はその範疇で意思決定されるためだ。

それでも米国では、高級ホテルやレストランに納品するほどの高質なケーキを製造販売するNPOが成立している。彼らの大儀は、職業訓練であるが、同じ事を日本で作ると、一般企業と同じと看做されNPO活動とは切り離されて捉えられてしまう。

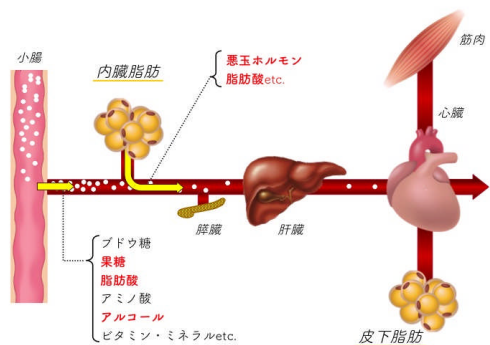
さらに、この国には、社会貢献＝無償というボランティア意識が底流にあり、社会事業経営のハードルを一層上げていくように思う。つまりかきすると、必要経費は、直接的に目に見える物に対する支出だけに計上が許され、人件費は含まれない事態を目にすることがある。これでは、個人の人生を心配することなく賄える権利的収入源を持ち、余った時間を注ぐことができる富裕層にしか、できない慈善事業となってしまう。

ひとに何かの親切を受けたとき、「馳走様」と言つ。今では、食事の饗応を受けた際の御礼のような使われ方

す。では果糖の供給源として重要な食品は何でしょうか？それは果物ではなく、砂糖です。砂糖は、ブドウ糖一分子と果糖一分子が結合して出来ています。缶ジュースを一本飲んだだけで二十グラムの砂糖が体内に吸収され、十グラムの果糖となって肝臓に流入し脂肪酸に作り変えられます。菓子やケーキ類には、もっと大量の砂糖が含まれています。合成された

脂肪酸をエネルギーとして消費できなければ、中性脂肪の形で肝細胞の中に蓄積して脂肪肝が進行します。

次に、内臓脂肪の影響を考えてみます。内臓脂肪は、皮下脂肪に比べるとエネルギーの出入りが盛んです。男性の出っ張ったお腹（内臓脂肪）は頑張れば凹みやすいけれど、女性の下半身についた（皮下）脂肪はなかなか取れません。そんな内臓脂肪からは、脂肪酸が常にガラガラと流れ出ています。その脂肪酸に晒され続けることで、脂肪肝は着実に進行していきます。そして何より決定的に重要なのは、多くの日本人は些細な不摂生で容易に脂肪肝になってしまう体質を持っているという点です。今回は脂肪肝の治療法（と言っても体重を減らすしかないのですが…）に少し触れてから、糖尿病の薬物療法に入っていきます。



【プロフィール】

（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高

をしているが、かつては茶道のお席における挨拶だった。その深意とは、本席に設えられているお道具や軸、花・打ち水に至るまで、見えないところで私のために馳せ走ってご準備をして頂いたことを理解して、そのご配慮に感謝申し上げます」といふことらしい。日本文化としては本来、隠された尽力の意味・価値を分かっていたということに他ならない。

とすれば、隠れた労苦に思いを馳せることができたかつての日本人より、それを読み取ることもせず、ただ表面的に現れたものだけで評価しようとする今の日本人の方が劣化しているかもしれない。

今日の社会は、多様化しているという。が、欧米の方がもっと触れ幅が大きく、日本のそれは未だ緒にいたばかりのようだ。しかし、そのわが国でさえ、多様な社会的要請に世の中が必ずしも応えられていない。一部の金持ちの名誉欲に頼るか、必要性を感じた人の善意にもたれかかってばかりで、この世が善くなるのか。

世間をより善くするための事業を健全に打ち立て、持続的に活躍させるということとは、従来の暗黙の常識にも挑むものであるだけに、着想を豊かに育んでいく過程を大切にしたいと願う。



福井県のアンテナショップが東京に2軒ある。南青山店の「ふくい南青山291」は県有地を活用し2002年に開業した。食品や工芸品を扱う物販に加え、飲食店、ビジネス支援機能を備えている。銀座店「食の國福井館」は2013年開業の賃貸契約で食品販売とイトインからなる。

まもなく契約関係の節目をむかえることなどから、現在、これらのあり方の検討が進められている。南青山店では主に立地特性に起因する来館者や売上水準の相対的な低さ、銀座店ではその狭さから拡張性の低さと機会損失がそれぞれ課題となっている。

筆者はその検討に関わることとなったため、アンテナショップの最新動向を探るべく、師走の東京を巡った。新橋から銀座、日本橋、そして表参道、南青山と移動し、鳥取・岡山（共同出店）、香川・愛媛（〃）、長野、広島、福井（銀座店）、滋賀、長崎、富山（2店舗のうち日本橋室町店）、奈良（〃）、島根、三重、福島、新潟、福井（南青山店）を見て回った。なお、石川県のアンテナショップは2014年の開業直後に訪れており、現在改装工事中である。

次号からそれらの紹介と考察、そしてリアル店舗である自治体設置のアンテナショップが、ネット社会においてどうあるべきかについて私見を述べてみたい。



写真：いちじくジャム（富山県）、梨ジャム（鳥取県）、ゆずジャム（愛媛県）、くわの実ジャム（長野県）、唐辛子みそ（福島県）、オリーブジャム（香川県）、レモンジャム（広島県）、抹茶ラテジャム（滋賀県）、柿バタージャム（奈良県）

世界に日本ラグビーの底力だけでなく、安心安全やマナーの良さをPRできたW杯や終わり、また街の風景もいつもの日常になるのかと思いきや、次はクリスマス・年末モードに。東京って忙しい街であることが日常なんだよねとつくづく感じるこの頃です。

さて日本が誇る文化資源として『ポップカルチャー』もそのひとつかと。おおまかに分類すれば『漫画/アニメ・音楽・ファッション』等がそれに該当するものですが、昨今はマイノリティな方々特有のライフスタイル(サブカルチャーと言われているオタク/地下アイドル/メイドカフェ等々)も含めてポップカルチャーと定義されています。

私自信も実は最近ドハマリしてしまった漫画があり、それによって趣味嗜好という生き方に大きく影響を受けてしまいました。それは『神の雫』というワインの世界を描いた漫画なのです(今更感否めませんが)。ストーリーの詳細は割愛いたしますが、この漫画を読破した私に何が起きたか？それはこよなく日本酒を愛しそれを商売にまでしている男がワインの世界を追求する業態の開発を真剣に検討している事からもわかるかと。ワインの何に魅了されたのか？それはワインが『自然・人・時』という3つの要素で構成されているからです。自然とはその土地の特性やその年の天候であり、人とはまさにその造り手を指し、時とは瓶詰されたワインが過ごす悠久の時間を指します。日本酒にももちろん『自然・人』は存在するのですが、『時』という概念が基本ありません。何でも作りたて、とれたてが美味しいのではなく、『時』を重ねていく事でワインそのものが成熟していく様が人間のようでして。若い男女の瑞々しさ爽やかさも素敵なのですが、様々な幸せや苦勞をともに共有してきた夫婦の佇まいに深みを感じるような。そこに50歳を目前にした私が興味を覚えるのは自然なことなんだとも思います。

そしてこの世界を漫画で教えてもらったというところに奥深さがあるわけです。ワインを紹介する指南書のようなものは本屋に行けば五万と存在します。しかし、漫画では主人公や取り巻く人々の生活や人生とワインを重ね合わせていく様子を人の言葉と画で表現していくのです。それは吞まずにはいられません。僕自身も同じイメージを共有できるのか？悠久時間を吞むとはどういうことか？と興味を持たずにはいられません。漫画という表現方法が持つパワーを改めて感じました。子どもたちの教科書も漫画にしてしまえばいいのに。

ポップカルチャーの反義語として『アカデミック分野に属するクラシックな文学や美術などの文化を表す"ハイカルチャー"』という言葉があるのですが、よくよく考えてみれば中世の欧州で生まれたオペラも江戸時代の歌舞伎も昔は大衆歌劇や演劇でした。それが今はその国固有の古典的文化としてハイカルチャーと位置づけられています。数百年後の世界ではアニメや漫画はもちろん地下アイドルコンサートやメイドカフェが上流社会の嗜みになっているかもしれません。あっ、でもメイドカフェ自体が上流社会のライフスタイルをデフォルメした文化が。



『富士の国から ~大魔神のたび~ 』中国 張家界への旅(2019.11.14~18)  
静岡県小山町まちづくり専門監 溝口 久

恒例の小山町日中友好協会の旅に今年もまた参加することにした。中国通のメンバーが決めるコースはいつも面白い。かつては町内在住の中国人がコーディネートする形で、それなりの費用を掛けて中国訪問をしていたようだが、会の発足から20余年を経てメンバーのエネルギーが減衰気味のせいも、最近では専らクラブツーリズムのツアーの中から選択するようになってきている。今回は「スリル満点の天門山と世界自然遺産・武陵源を大満喫5日間」とあった。これまでの海外旅行でスリルをもとめて旅をしたことはない。地名も知らないし、どこにあるのかさっぱりわからずまい、どこに行くのと聞かれても「四川のようだよ」ぐらいの返答に、訊く方も「料理が辛いよね」程度のコメント。実は四川ではなく湖南省だった。ああ。

目的地の湖南省張家界市の緯度は上海よりも南になるため、内陸部でありながら今の日本並みの暖かさだ。市の中心部にある武陵源が1992年に世界自然遺産に登録されてから知名度を上げた。ただ登録されたから黙っていても人が多く来るわけではなく、そこには日本人には真似できないあっと驚く観光開発がなされていた。その事は後述することにする。

11月14日成田13時50分発、上海経由で張家界空港に着いたのは23時になっていた。翌朝から本格的な観光が始まる。

張家界市は武陵源山脈にある。自然溢れる武陵源自然風景区は、石灰岩などの岩石で構成されたカルスト大地が雨水や地下水などによって侵食されてできた地形で、険しい峰が連なった絶景だ。世界遺産にも登録されている。

標高1260mの山腹に開いた巨大な穴がある。穴の大きさは高さ132m、幅57m、奥行60mあり、天門洞と名付けられている。遠くから眺めるだけじゃなくて、その洞に行きたくするのが人情、日本ならしないだろうけど、中国は違う。この景勝の地を国から借り上げた民間が、この人情に報いるために観光開発をする。始めたのが1990年代末、天門洞近くまでつづら折りの道路を建設。中国人にとって縁起のいい数字の9にちなんで99のカーブがある。いつもならロープウェイで登るのであ



るが、この日はメンテナンスの時期に当たり運転されておらず、マイクロバスで登ることになった。これがスリル満点、岩の地であるので法面の角度は急だしオーバーハングして道路がつけられている箇所ありで、崖っぷちを車の性能の許される範囲を目一杯使ったの走行だから、この高さで落ちたら即死やなあ と無事の到着を祈らずにはおられなかった。コーナーに1番から番号がふられていて、99の数字を見ることができ安心した。天門洞が目の前に現れた。そもそも、何があった穴が開いたのだろうか？地球の果てしない歴史の中から生まれた産物であることには相違無い。

ここまで来ると穴の中に立ちたくするのが人情ってもの。階段がしっかり造られている。これまた段数は999段。最近、膝にガタが出始めていることので、階段上りにはチャレンジせずに、山をくり貫いて造ったエスカレーターでいくことにした。同行のご年配諸氏は皆自らの脚で登った。洞の下から上を見上げるのだが、ポロポロと欠け落ちてくることもあるらしく、ガラスの屋根が設けられていた。次は洞の上に登って見たいとの欲がわく。切り立った岩山に通路が造られていて、そこをたどって次の登りのエスカレーターに向かった。この間の通路がスリル満点、下を覗けば足がすくむ。空を見れば、な、何と人が飛んでいるのではないか！ウイングの付いたボディースーツを着て飛行機や山から飛び降り、飛行時間は通常1分に満たない。飛び出して8秒後には時速200キロに達する。穴を通り抜けて行った。どうやら死亡の件数も多いらしく極めて危険なスポーツだ。くわばらくわばら。他にもつづら折の坂を全身ローラースケートで滑り降りてくるスポーツもあるようだ。こちらだって危険満載だ。

天門洞の上の台地に到着。柱状になった岩山の連なりを眺めつつ、真下には断崖絶壁を望むことになる散策道、崖からオーバーハング、それに飽き足らず足をガラスにしてスリルを増していく。相当にファンキーです。ガラスが傷つくのを防ぐために靴カバーを掃いての歩行になる。天門山自体が巨大なアトラクション施設と化している。生真面目な日本人には到底真似できるものではなさそう。なんだかんだ5000円ぐらいかかる、これが毎日数万人来る勢いだから相当な売り上げだ。何年か後に来る機会があるとすれば、またまた進化しているんだろうな。(つづく)

